書籍：「監察医の涙」を読んで

店頭で元監察医の著書「監察医の涙」が目に止まり、購読した。

監察医の仕事は、「もの言わぬ死体から、死んだ原因を探り出し、死者の生きていた時の人権を守る。
そして事故死か、自殺なにか、他殺なのかを見極めその事件の背景や、なぜ死んだのかを探る。」とか。

著者は、「人間にとって死とは何なのか、死ぬとはどういうことなのか。死を突き詰めていけば、人間にとって生きるとはどういうことなのか、命の大切さ、尊さというものが分かるのでないか。
二、三年、死の学問である法医学をやってみよう。臨床医になるのはそれからだ。」と大卒時に決心して監察医になり、結果、退職まで死体を扱って３４年とか。

その間の、しかも「今回は、心の奥に刻まれた切ない話を集めた」というだけに、元「観察医の涙」の一粒一粒の背景の数々の事例についつい引き込まれ、一気に読み終えた。

著者は、ものは言わぬ２万体の死体からの語りから、「現職を辞めたならば、その代弁者になりたい」と思い、「それによって住みよい社会、明るい家庭を作り出す手助けができれば」と、また、解剖等のデータが予防医学へと繋がるのでないかと、出版を決意しているようである（既に、「死体は語る」を２００１年に出版）。

本書中で特に印象に残ったのは、高齢化社会だけに、６０歳以上の老人の自殺者の背景について触れられていた次の記述であった。

世間的には独居老人に自殺者が多いと思われがちだが、老人の自殺者数の「家族と同居していた割合は約６３％で、同居老人の自殺率は独居老人の１．６倍、動機は『病苦』が約４０％であるが、それは表向きの数字で、ガンを除けば死に迫った病気はほとんどなく、身内の温かいいたわりや介護があれば十分に癒され乗り越えられるものばかりだ。
老人の自殺の本当の動機は『病苦』ではなく、家庭の中で冷たく疎外された家庭問題にあるといっても過言でない。」と言い切る。

また、「老人の遺書は立派である。
冷たくされて身内の者に不平不満を書いている事例はない。ただ一言『みなさん、大変お世話になりました』とだけ書かれているものばかりである。
どんなに家族に邪険にされたとしても、その愚痴や恨みの言葉を飲み込み、黙って自らの最期を迎えるのである。
その一言に込められた老人たちの思いは切なすぎる。」とあった。

阿部幸泰　　（2010 年 11 月 24 日　記）